

# 水 泳 部

委員 安 住 正 夫

水泳部の前身たる水泳會は、雜誌によれば卅八年に産聲を擧げた、四十年に到る迄は。一見雜誌には記録が無い。記録は四十年十月の龍南會雜誌に初まる

四十年 自炊生活。師範益本氏。本陣舞鶴城下松濱院とある。松濱院など名丈は闊雅で立派らしいが、唐津生れで唐津育ちの俺でさへ知らぬ位だから、何れ大した物ではあるまい。八月四日には與謝野鐵幹氏來唐、近松の故跡近松寺の歡迎會に臨む者數名とある。期間は七月十日から八月十日迄。めしたきは、炊婦ならずして炊夫である。唐津新聞主筆佐藤氏は此の時から最近迄部に對しては随分と御心配にあづかつたらしい。

四十一年 相變らず松濱院である。八月五日の三里遠泳の記録に當時の面目躍如たるものがある。『空腹と潮と波と尙風と打ち戦ひつゝ午后一時難なく高島着。飢れた腹は上陸したからとて癒ゆべくもあら

ねば、上陸するや否や先該島所在の菓子舗を襲ひ、殆んどあらゆる菓子卵子等を食ひ盡し、或一家に依頼して中食を其土間に蒔を敷かせて大に食ふ。其時の甘かつた事と云うたら今に其當時を追想すると何だか唾がたる様な氣持がする。食うて終ふまでは金の考がなかつたが偕て金と云ふと、勿論裸体で浮いて來た事だから一文もない。婆さん、食いにげはせんとたい。金は後から送りたい。心配せんとよかとは或る會員中の一名の言葉であつた。すると婆さんは笑うて生等一同のこの一大成功を祝ふ。誠に人離れした質撲な人氣なものには驚いた。』と。七月十日——八月五日幹事河村總務。

四十二年 水泳會三年にして獨立して此年龍南會水泳部となつた。獨立すると共に、こゝに亦水泳部受難史が初まつた。受難史とは合宿難である。次の記録がある。『豫て當地の有力者佐藤氏を経て約束整

ひ居りし合宿所に不都合生じ、數度の交渉の結果は松濱院の無闇と暑き部屋に假合宿所を置く事を餘儀無くせられたり。當地の一等旅館とも云ふべきが吾人との約束を破りしは遺憾千萬と云ふべきか。松濱院など無闇に閑寂な名でも。無闇に暑き云々とある。知らなくても自分の恥にはならない。『七月廿四日、晴、三日間を過ぎし今日此頃は、そろそろツウホシを初む。』とある。ツウホシとは面妖など讀む人は頭を傾ける事だらうが、ツウとは龜の甲と云ふと。唐津では、龜の甲の事をガメンツウと云ふ。ツウホシとは、龜が暖い春の日に甲羅を干す様に、焼けた白砂の上に腹ばつて太陽の光線に背中を黒くなす事である。因に言ふ此年は文壇當世の流行兒江口喚氏が雜誌部委員となつた年である。

四十三年 創立二十週年記念號が出、「龍南」欄には「日韓併合」乾坤將に一轉せむとす」等と意勢のいふ字が羅列されて居る年である。松濱院。七月廿日開會。波浪白く碎け、延々たる白金の線を作る、壯觀眞に筆すへからず、正午に近く螺螄を得る事無慮一百、一同凱歌を奏して歸る」で日記は初つて居る。

七月卅一日には西唐津に一同鯨見物に行つて一人見料十錢を拂つて入つて見ると、僅か二間足らずの子鯨なのに喫驚して十分見ずに歸る」と驚いてある。此日午後松濱院旅館を辭して唐津中學校寄宿舎に移轉した。この年の高島遠泳は幸運で「時に小山の如きうねり頻りに到り或は高く或は低く見わつ隠れつする様の面白さは知る人ぞ知る」とふざけ、島に到着しては「各先を争いて葛湯をのみ、またく間に五升の葛湯を平げ余力よく二升の甘粥二十五斤の甘蔗を征す」とふんぞり反つて居るが、十哩の時は「かくて二間茶屋に近くや、救助船遇々激浪の爲に艀を打られ、止むなく一時間の休息を二間茶屋に取らざる可からざる運命に到りぬ」と散々な目に會つて居る、尙此年は九月に新學期が初つてから、書津湖上に水泳部大親睦會が開かれた。

四十四年 此年は部に取ては幸運な年であつた。佐藤氏の盡力で虹松原特等旅館海濱院借室は幸にも院主村崎氏の義侠的好意を以て交渉まごまる、吾々學生に此特等旅館の立派な座敷は、少々結構すぎて勿体ない位である」とこの大喜びで、船は船として「か

ねて大に心を碎いて居た借船の件、幸い青木市郎君の周旋で濱崎村の有志堤氏より二間一尺餘の漁船を借る事となつた。且又此舟は帆付きのものでセーリングの練習も出来る。誠に願つたりかなつたりの次第である」と記録してある。船と宿とに、とぼしい部費を割かれる現在と比較して、實に隔世の感がある。以上は二月號の雜誌によつた物であるが、更に六月號には其後半の日記が掲載せられ、其初めに水泳術の有難みを説教してある。「今の汽船は昔の千石船と異つて強大であるから覆る事は無いなど思ふと大の誤である。まづそんな大きい事は兎に角例へば手近に渡船が覆つて死んだ人は多い者である。千金の子は盜賊の手に死せずとか言ふが、まして水位に溺れたでは面目次第も無い話だ。」と、泳げないと溺死の危さがあるから、水泳術を習得するのは、危きに近かざる君子になる者の一課目だと書いてある。宿と船に幸福だつた代りに、此年は亦々水神ににらまれた「飛脚直ちに馳せ來り審判船轉覆、乗せありし水着も時計も薬もメガネも逆まく浪にさらはれたり」と、かかる悲劇ありしと知らず驚き立ち上つて馳せ參ずれ

ば艚は眞ツ二つにと打折られ舟は水一杯のまゝ岸邊に引きあげられたり、とかく黙して居るべきに非ずと一同水に入りてかけごさがせご影だに見ず、せめて佐藤君がメガネを拾ひ得しぞ不圖の獲物なりけれ」と、太平記壇の浦もごきで、殊に最後の一段は「ぞ」のかゝりで書いてある。合計簿のきれ端見たいな物に「魚三十尾一尾平均九厘三毛二絲」と書いてあり、一日食費卅五錢とあるのを見れば、現在の魚廿錢で一食分の比較して、眞に一昔しの前を覗ふ心地がせらるゝ。水泳師範は加藤貞雄氏。期間は甚だ永くて七月一日から八月九日まで約四十日間。

大正元年(明治四十五年) 變な願が警察にさし出してある。曰く「裸体游願空砲發火願」と。七月廿三日には夜中大に暴れた。朝になつて見れば、船は全然砂の中に埋まり、附屬の踏板全部は流失のうき目を見た。降る雨の寒い中に、ふるへながら一同砂を掘り返して船を掘りだした。七月卅日に及んで兼て御不例の先帝陛下の崩御があり部は校長の電報で解散せられた。

大正二年「唐津に遊びし事なきものは唐津の善惡

を口にする勿れ、南瓜の美味は食して初めて知るを得る如く、唐津の眞價は唐津に遊びて初めて知るを得む、唐津に遊べ、而して我水泳部の如何に美味なるかを味へ、いざや本年度水泳部部員の活動を「示さむ」に日記は初まる。よほご南瓜の好きな人だつたと見える。師範加藤氏。七月十四日——八月九日。

大正三年 不幸にして記録を發見する事が出来ない  
大正四年 食費卅五錢が四十錢となつたのが目につく。合宿は金波樓に變つた。屢々前にあつた如く今年も部員が土地の水泳協會の子供達を教へる事となつた。八月三日には「水泳協會の子供達が昨日に倍して集ひ來る、師範が模範を示されて後我等一同助手を仰せつかり、子供等と共に海中に躍り入る、浪高くして思ふ様に教授も出來ず」と大いに大人振り先生振りを發揮してある。師範は清水氏。

大正五年 今迄の合宿所金波樓は、唐津灣の潮水が燻く様な盛夏の陽に、終日のたりのたりと光つて居る渚を。十歩と距れぬ所にある。唐津屈指の避暑用のこの旅館は、學生には勿体なき合宿であつたが、この年に及んで熊本幼年學校の弱輩連に惜くも奪ひ

去られた。加へて水泳師範の清水氏は突然の御病氣のため、出唐不可能なるに及んで、委員の狼狽は極に達した。運動の結果後者は流派は異りつゝも尚山内流師範甲斐彦四郎氏を迎へ、前者は有志佐藤氏の盡力に由り海岸と程遠からぬ石河氏邸の二階に居を安んじたのは幸であつた。

松浦河を渡し舟で渡り、二里の松林を向ふにつき貰けると、神後の昔の趾たる濱崎村と云ふ一郭がある年中行事とて古風の祇園祭があり、屋台を引き、甘酒を醸し、ひなに一つの行樂が行はれる。部員一同は夕食の後、涼しい松風に浴衣がけで、てくてくと祭り見に行き、先輩三氏の邸に招かれて、款待の酒に酔ふた。七月十六日の日記である。

唐津灣の深さは自分の記憶をたぐる丈で昔と比ぶれば年々淺くなつて居、潮が干れば一面の水面は變じて思はぬ干潟となる。部員は珍らしさうに砂を掘つて貝を掘つた。取れるまゝに興が湧いて、濱傳ひに西唐津、大島と傳つた。濱で子供が貝を掘る様に何が掘つて居る、尋ねると鐵片を掘つて居る。一斤五厘に賣れると云ふ、「歐州戦争又影響す」と驚いてある。

七月十日より八月五日迄廿五日の期間である。

大正六年 一哩を距てた海上にほつつりと、つゝましやかに鳥島が浮んで居る。一同は十六日に此處迄泳いで汗一杯になつた漁夫を援けて一處に眞赤な顔して網にかゝり人食ふと云ふ鱈の子を皮を剥ぎ、鱈は醜い顔をしてると石で頭を叩きつぶし、散々の悪戯をして、扱は御禮にと貰つた廿尾許りのピチビチの鮮魚を一人が一つづつ、尻つぽをつまんで子供の様嬉しがつて歸つた。七月廿四日には、例年の如く三井の好意によつてランチに乗つて、七つ釜見物と洒落た。「ざんぶとばかり踊り入り、列をなして最も左の穴に向つた、洞口に着いた時水急に冷かで血が逆流した様に感じた、玄海の波に鍛へし五高の健兒如何で屈すべき、勇往邁進して突入した、黒ずんだ天井から滴々と落つる雫を見、又玄海の大うねりの鞆と響き渡る音、剩へ怪鳥の奇聲を聞ては扱は海神の魔窟かも知れんと思つた、夫に奥に行くに従ひ段々水が冷くなるので、實際鮫龍の口の中にも入る様な氣がする、暫くするとボウと明くなつて遂に通り抜け、更に之を迂廻して無事船上つた、其時は唇

は紫に變つて居つた」と盛に探見記事を列ねてある。然しボウと明くなつて等とは眞赤な虚言である。穴に入らぬ前から、否船の上から、最左端の穴はつきぬけに見えて居る。凄いのは右から三番目の洞穴である。これは今年吾々が探見した。三月に出る部報を見て感心するがいゝ。師範志永氏、期間七月十五日

——八月五日。

大正七年「事實の報道としてのみならず、藝術的創作として讀んで呉れ」と反りかへつた龍南詩人長谷川公一氏の筆になる日記は、「音に名高い玄海は偉人の胸の様に、大きい鯛も跳れば鯨も咆ねる」の一節を以て初まる。此の年は十年の苦節を守つた部旗が色あせた残骸を隠して、現在の眞赤な柏の旗が出來したのを手初めに、部の生活を多趣ならしむる事實に満つた。第一に起つたのは水難救助の美事である。蒔いた種は忽ちに生ねて、會員の努力は所名物の松露饅頭の御禮に化け、不慮の好事に一同は相好を崩して嬉んだ。同時に西唐津行きの一は菓子屋を襲ふた常習晝鶯の首ツ玉をおし着けて警察につき出した。共に七月廿六日の事。餘程の善行と君子顔

の部員は、夫でもストームと跳りデカンショ丈は止める事出来ず、一帶の不評判を彌が上に高からしめ、次の年の合宿所を遂に人跡絶わたり虹松原の中に移轉せしむるの結果を生じた。此年師範の變化あり今迄燈臺基暗しで知り得なかつた五高教授の間に池田一幸先生の最適任者を發見し得たのは、部のため望外の幸福であつた。合宿は城内中村氏方、期間七月十五日―八月四日。

大正八年 期間、師範去年と同様である。鳥島の蠓螺取りも同様である。たゞ五高生活の表象かは知らぬが眞平だと目をむかれて、「普通民家」に合宿の借し手なく、期間の前半は虹松原に、後半は中學校に、前後二回浮草の様な流れ者の生活を送らざるを得なかつた。

次は今年であるが、之は部報の方で報告する。

初めは遠泳成功者、各代の委員、参加者の名をまとめるつもりであつたが、あまりに興冷めた事務的な事であるから止した。この三つを止すと殆んど書く事がない夫れでも全然筆をさらぬと云ふ譯にも参らず、龍南會雜誌の頁をくつて居る間に、眼についた所を拾つた結果が、これである。勿論沿革史と名乗るべきものではない。第一沿革史などと云ふ体をなしては居らん。然し雜誌を受取つた人からは無味乾燥の沿革史かど一顧も興へられず、それでも面倒さをこらへてペンをとる委員も、ほんとうに中々の事である。まあ是位で我慢していただき度い。讀む人も官報見たいな事實の羅列を要求するのではなからう。